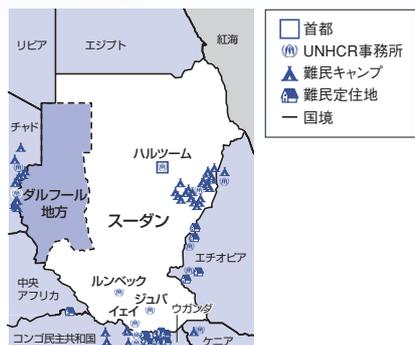


ゼロからの出発 スーダン南部

共同通信社 ナイロビ支局長
ふちのしんいち
瀧野新一



20年以上続いたスーダン内戦が1月に終結。自治を獲得した南部地域の暫定首都ルンバックを今年2月、約8か月ぶりに再訪した。「スーダン南部ってどんな所？」と日本人の知り合いに尋ねられると、いつも「まるで風の谷のナウシカか未来少年コナンの世界。一度、文明が減ってしまった後の世界のようなだった」と答えることにしている。映画やマンガの話ではない。現実にもそういう荒廃した地が自分たちが立つ地球上にあることを知ってもらいたくて。

スーダンは世界でも有数の難民・避難民を流出している国で、ウガンダ・ケニアなど周辺7か国で難民が約55万人、国内の避難民も約400万人にも上る。彼らをどう故郷に帰還させるのかは平和後の大きな課題の1つに上っている。

ルンバックで昨年帰還した元避難民らに会った。「きょうの夕食？この草よ」。崩れやすそうな粗末なわら葺小屋数十軒が身を寄せ合う一角で、ヌラ・サクさん(42歳)はその日、森の中で採取してきたという緑色の野草を取り出した。

サクさんは内戦終結を見込んで昨年7月、首都ハルツーム郊外のキャンプから故郷ルンバックに歩いて戻ってきた避難民約350人のうちの一人だった。約20年間待ちこがれた帰郷だ。敵対する政府軍の目を逃れ、多くの地雷原を避けるなど幾多の危険をくぐり抜けながらの旅は、約4か月もかかった。

彼らの内訳は子ども約150人、女性約170人、男性約30人。男性が極端に少な

い訳を尋ねると、内戦終結前なので途中で政府軍につかまり、多くの男性が連れ戻されてしまったという。

だが、苦勞の末にたどり着いた故郷でサクさんらを待っていたのは、皮肉なことに、さらに厳しい生活だった。

「この細い腕を見て」。サクさんはやせこけた両手をぐいっと前に差し出した。

「乾期の今は何も栽培・耕作できない。雨期にはマラリアなどの病気も増えるし、雨で家も壊れてしまう。毎晩、地面の上でビニールシートを被って眠るのよ」と訴えるサクさん。現在、彼らは森で木切れを集め、炭にして市場で売って細々と生きている状態だ。「故郷に戻れてうれしい。でも、ハルツームのキャンプの方が暮らしは楽だった」と小声で漏らした。

「南部の発展に難民らの帰還は必要だ。だが、まだコミュニティには彼らを受け入れる余裕はない」と打ち明けるモジョク東ルンバック郡長。内戦中に父親を病気で失ったマルクルさん(20歳)は「これまで外国の援助で何とか生きてきた。干ばつがひどく、耕作しても収穫は少ない」と苦しい暮らしぶりを語る。

スーダンでは独立前の1955年、南部を舞台に第1次内戦がほっ発した。その後、



元避難民の多くは女性と子ども。ルンバック
写真撮影：筆者



スーダン南部の暫定首都ルンバックで会った元避難民ら。この草が夕食になるという。写真撮影：筆者

約10年間の平和な時期を挟んで再発した今回の第2次内戦と合わせ、計約40年間も戦争が続いた。

そのせいで、壊れた戦車や装甲車の残骸が各地に散乱し、独立前のれんが造りの建物は崩壊。住民は粗末なわら葺屋根の小屋に住む。電気や水道、舗装道路、電話回線などのインフラは全く存在せず、ビジネスの可能性を探りに来た隣国ケニアの男性でさえも「アフリカ諸国は独立の際、植民政府によるインフラや法整備など国家の基礎があった。しかし、ここには本当に何も無い」と途方に暮れていた。

隣国ウガンダやケニアに逃れた難民らの口からは「戻っても満足な教育が受けられない」「本当に平和が続くか分からない」などと帰還に慎重な声がしばしば聞こえてくる。

UNHCRの担当者は「どう難民を帰還させるかじゃなく、彼らが自ら帰りたいと思える環境をどう作り出せるかだ」と説明する。難民が故郷に戻る道路は十分になく、推定約200万個とも言われる埋設地雷の危険があり、病院や学校の数も不十分だが、「内戦の終結後、支援国の反応は鈍い」と現地国連やNGO(非政府組織)関係者は口をそろえる。NGOオックスファムの現地代表も「飲料水にしても今、住民1000人以上に井戸は一つしかない。難民が一斉に戻れば水不足で大変な事態になる」と強調する。

今後の行く末が依然不透明な現段階では、最低限の食糧や安全、教育などを享受できる難民暮らしの方が「まだまし」と判断して故国への帰還を渋る意見が多いのは、一人の人間として十分に理解できる。

取材すればするほど難題は山積みで、スーダン南部の人々が今から向き合わざるを得ない国家再建の道のりの険しさの思うと、思わず身震いせざるを得なかった。